

## イントロダクション

### <授業のポイント>

今回の授業では、まず受講に際して必要となるコンピュータとネット接続の設定を行い、それが済んだら、授業の全体的な方針と実際の授業の進め方について説明します。その後は、実際に配布資料を使って進めながら、授業の雰囲気馴染んでいただきます。

### 1. コンピューターとネット接続の設定

- ・教室でコンピュータをインターネットに接続するために必要な設定を行う。
- ・大学の授業支援システムである WebCT についての解説。
- ・授業内でプレゼンテーションを行う際に使用する OpenOffice のインストール。

### 2. 授業の方針と内容について（資料1、資料2）

- ・プリント（資料1）を見ながら、授業の方針と各回の授業の進め方について説明する。
- ・プレゼンテーションのためのグループ分けを行う。
- ・プレゼンテーションのための資料（資料2）を配布し、発表の方法や準備の進め方について説明する。（時間に余裕があれば、実際にグループごとに打ち合わせを行う。）

### 3. 自己紹介

- ・OpenOffice のプレゼンテーション機能である Impress の使い方に慣れるために、それを使って簡単な資料を作成し、受講生それぞれが自己紹介を行う。（資料、発表ともに日本語で作成可。）

### 4. English から Englishes へ（資料3）

- ・資料3の英文を読み、単数形の English という捉え方から、多様性と変化に富んだ複数の Englishes の概念への移行について、その意味するところや、その背後にある事情について学ぶ。
- ・資料の熟読を行ったうえで、その内容についてクラスでディスカッションを行う。

### <参考資料>

Abley, Mark. *The Prodigal Tongue: Dispatches from the Future of English*. London: Arrow Books, 2009.

Kirkpatrick, Andy. *World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Walmsley, Jane. *Brit-Think, Ameri-Think: A Transatlantic Survival Guide. Revised Edition*. New York: Penguin, 2003.

## 資料1

### <授業の方針>

- 英語と異文化について——授業タイトルからもお分かりの通り、本科目では<英語>という言葉を中心として、異なる文化を理解することを主な目的とします。ひとくちに<異文化理解>と言っても、ことは単純ではありません。それは一つには、私たち日本人の文化から見て異質なものであるということであり、英語圏の文化を<異なる文化>として理解することを意味します。またいわゆる英語圏あるいは英語を日常的に使用する人々の社会があるとして、それらの間にも様々な違いがあり、<異なる文化>が存在します。劇作家のジョージ・バーナード・ショウが、イギリスとアメリカは共通の言語によって分断されていると言ったことは有名ですが、これらの文化を英語圏というカテゴリーでひとくくりにしてしまうことはできません。違いがあるとすればそれはどのような違いなのか、その理由は何なのか、またそこに英語という言葉がどう関わっているのかということを知りながら、英語と文化について考えてみたいと思います。
- 受信だけでなく発信も——授業ではまず英語の書籍や雑誌などからの抜粋やウェブ上の記事などの文書資料を正確に読み、インタビュー音声や映画、さらにウェブキャストなどの視聴覚資料の内容を理解することを目指して、様々な練習に取り組みます。さらに日本人として英語圏の文化にアプローチする場合には、情報を受け取るだけでは不十分であり、自らの英語を用いて情報を発信する能力も必要になりますので、英語を使った資料の作成や英語での個人プレゼンテーションも、授業の一環として取り入れていきます。ただしこれらはあくまで授業の中で行うシミュレーションですので、失敗することを恐れずに、積極的に取り組んでいただければと思います。発表に際して、英語の発音などもできるだけ向上させたいと思いますので、時折ミニゲーム形式で発音練習をするような機会も設けられればと思いますが、これはあくまで補助的なものとお考えください。
- グループ内での協力——さらにこの授業では、グループで協力して行う作業を重視しています。異文化間コミュニケーションも大切ですが、まずは身近なところから、クラスメートと意思の疎通を図り、役割分担を行うところから始めましょう。グループでのプレゼンテーションのやり方に関しては、メンバーの方々の自主性にお任せしますが、単に英文の内容を訳す、まとめるというだけでなく、関連する事項について調べた上で報告を行うという風になると、より有意義なプレゼンテーションになると思います。授業進行に支障をきたしますので、できるだけ持ち時間に収まるようにお願いします。
- リサーチとレポート作成——グループでの作業も重要ですが、受講生それぞれが独力でテーマを見つけ、それについて調べ、その結果をレポートにまとめることが、この授業の最終目標となります。受講生の皆さんはお忙しい方ばかりなので仕方がないとは言えますが、日にちが押し迫ってからレポートの準備に取り掛かるケースがほとんどようです（私もそのタイプなので良く分かりますが）。今回は早めに準備を始められるように、授業の内容としてレポート作成のノウハウについてもお話できればと思います。ちなみに期末レポートは英語で書いていただくかと考えていますが、いかがでしょうか。諸事情により無理な方、または添削を希望される方は、講師にご相談ください。

### <授業の進め方>

異文化理解科目（英語）A は、英語圏の、あるいは英語に関係のある様々な文化事象に、リサーチとプレゼンテーションを通してアプローチを試みる授業です。各週の授業では、講師がテーマを設定し基本となる資料をお渡しします。資料はプリントや電子ファイルの形でお配りします。受講生は、

- 1) 資料をしっかりと読みこなし
- 2) 調査の必要な事柄を発見し
- 3) ウェブなどで情報を収集し
- 4) リサーチの成果を報告する

という一連の作業を行うことを求められます。なおこれらのリサーチとプレゼンテーションは、グループで行っていただき、OpenOffice 中のプレゼンテーションソフトである Impress を使い、発表用資料を作成していただきます。

また、各週のテーマについて、講師が資料を用いて補足の説明を行います。

### <成績評価について>

本科目は、講師による解説が中心の「講義」というよりも、受講生の参加によって成り立つ「演習」の要素が強い授業です。したがって成績評価も、「出席」「授業での活動への参加」「課題の提出」を重視します。お仕事の都合などで欠席される場合もあると思いますので、講師やグループのメンバーとの連絡を密にとり、担当箇所の資料をメールで送るなどの工夫をしてください。

成績評価に影響する課題は

- 1) グループによるリサーチとプレゼンテーション（1グループ1回あたり10分程度）
- 2) 受講生それぞれが自由に設定したテーマに基づくプレゼンテーション（全員必ず一度は行う。基本的には英語で。後半に集中しますので、準備はお早めに。）
- 3) 2番めのプレゼンを元にしたレポートを作成（全授業終了後に、電子ファイルとしてメールで提出。これも基本的に英語で書いていただく。）

の三つです。授業中にお配りした資料や紹介したウェブサイト、音声・映像資料等も、レポート作成の際に大いに活用してください。

### <講師との連絡>

欠席や遅刻などのご連絡や、プレゼンテーション、レポートその他についてのご質問は、講師のメールアドレスまでお願いします。（アドレスは配布資料の冒頭に記載。）特に授業とは関わりのないこと、例えば英語についての質問や旅行の土産話などでも結構ですので、どしどしご連絡ください。特に木曜日にも受講されている方は、英文メールを送っていただければなお良いと思います。何事も練習になりますので。

## イギリス人の暮らしと階級

### <授業のポイント>

今回はイギリス（特にイングランド）の階級（class）について資料を読みます。制度としての社会階級は年々形骸化していると言われますが、イギリスについて書かれた本などを読むと必ず階級について一章が割かれていることから分かるように、イギリスの文化とそこでの日々の生活においては、今なお階級の区別が大きな意味を持ちます。外から見る限りでは細かすぎて意味不明なイギリスの階級に、特に「階級意識」と「ことば」の側面からアプローチを試みながら、イギリスらしさの一端を探ります。

### 1. イギリスにおける階級 （資料1）

- ・日本語での解説を読み、イギリスの階級制度についての基本事項を確認します。

### 2. 階級とことば （資料2）

- ・英文資料を読み、イギリスでは階級の違いと人々が用いることばとの間に密接な関係があることを確認します。
- ・資料の内容と英語表現について、クラスでディスカッションを行います。

### 3. グループによるプレゼンテーション （資料3）

- ・低い階級に属すると思われたいくなく、絶対に使ってはいけない七つの単語、<七つの大罪>について書かれた、資料2と同じ本からの抜粋をお渡しします。
- ・今回もグループごとに担当箇所をよく読み、内容の説明と補足の解説をしていただきます。

### 4. ケーススタディー

- ・今回の授業内容に関係のある映像作品などを参考資料として観賞していただきます。紹介する作品は未定。観賞前に、追加の解説用資料をお渡しします。

### <参考文献>

Fox, Kate. *Watching the English: The Hidden Rules of English Behaviour*. Boston: Nicholas Brealey, 2008.

黒岩徹、岩田託子編『ヨーロッパ読本 イギリス』河出書房新社、2007年

## 資料1

### A. イギリスの階級分類

イギリスの階級はアッパー・クラス (upper class)、ミドル・クラス (middle class) とワーキング・クラス (working class) に大きく分けられる。ここまでは他の国と同じであろうが、イギリスではさらに、ミドル・クラスがアッパー・ミドル・クラス (upper middle class) とロウワー・ミドル・クラス (lower middle class) に分けられ<sup>①</sup>、しかも、この二つのミドル・クラスは、実はまったく違う階級なのである。

まずアッパー・クラスであるが、これは、伝統的には仕事をしなくても食べていける人々、つまり大地主からなっている階級であった。広大な領地と屋敷をもち、土地を収入源としている貴族と大地主である。それに対してミドル・クラスとは、なんらかの商売、あるいは職について収入を得る人々を指す。さらにワーキング・クラスとは、肉体労働者や職人などからなる階級である。

これが伝統的な定義であるが、現在では事情は変わっている。アッパー・クラスといえども会社を営んでいたり、職についている人々もいるし、ワーキング・クラスを自認していても、会社勤めをしている人々もいる。要するにイギリスにおける階級意識とは、社会科学的定義とは別で、文化的な背景からなる<sup>②</sup>ものだというのが、厄介な点なのである。純粹に収入、職種、教育では決められないものがある。

(黒岩、岩田編 38-39)

註1 さらにこれらの中に属するミドル・ミドル・クラス (middle-middle class) もある。階級の在り方が多様化し細分化しているという状況があり、分類のための用語もだんだんと細かくなってきている。

註2 「社会科学的」とは違う「文化的」な事情とは何か。ここでは明確には述べられていない。一般に「伝統」を重んじるイングランド人だけに、階級制度の存続にもまた伝統重視で現状維持を好む彼らの気質が表れているのかもしれない。つまりここで言う「文化」とは、既にあるものをあるがままに受け入れて、それに従って生きようとする態度のことであるとも解釈できる。

### B. 階級とことば

ひじょうに大雑把に言ってしまうと、アッパー・ミドル・クラスとは、もともとは聖職者、法廷弁護士、学者といった profession<sup>③</sup>と呼ばれる、いわゆる「知的職業」に属する人々、それから軍隊の士官、大規模の商人といった人々からなる階級である。地主階級の長男以外の息子たち、つまり家や土地を相続できず、なんらかの職業につかなければならないジェントルマンたちが主に形成する階級なので、アッパー・クラスとのつながりが強い。

それに対して、ロウワー・ミドル・クラスと呼ばれる階級の人々は、従来はワーキング・クラスの出身者が、わずかながらも教育を受けて、事務職や百貨店の店員などの職を得て、ミドル・クラスの仲間入りをした人々であり、したがってワーキング・クラスとひとくくりにはされる場合が多いのである。

こういうわけで、アッパー・ミドル・クラスとアッパー・クラスの間は RP<sup>④</sup>を話し、ロウワー・ミドル・クラスとワーキング・クラスは、それぞれその土地の方言を話すのである。ところが、同じ RP と呼ばれる発音も一種類ではない。イギリスのアッパー・クラスの頂点といえば、当然王室のメンバーであるが、彼らが話す RP は、BBC (イギリスの公共放送) 英語の RP とは違う。さらに言うと、オッ

クスフォードやケンブリッジの教授が話す英語もまた、BBC 英語や王室英語と微妙に違うのである。

通常 BBC 英語と呼ばれる RP は、文字通り BBC のアナウンサーが話していた英語で、なまりのある人々が教え込まれる種類の RP である。したがって外国人にとってももっとも聞きやすく、また、イギリス人にとっては「教養がある」「信頼がおける」「品がある」などといった印象を与える類の英語になっている。

いっぽう、王室のメンバーの英語には、「上流階級なまり」を聞くことができる。BBC 英語の比べて、母音を長く伸ばし、まのびした印象を与える英語である。この英語は一般的には「気取っている」という印象を与えるとともに、BBC 英語とは違って、知性や教養をあまり感じさせない。逆に、話し手がいささか間が抜けているとか、知的レベルはむしろ低いほうだという印象を与えるのである。これは、イギリスのアップパー・クラスには伝統的に、「知性的でない」というイメージがつきまとっていること、そして、当のアップパー・クラスの人々も、このイメージに抗議するどころか、誇りに思っている<sup>⑤</sup>ところさえあるからである。(黒岩、岩田編 39-40)

**註 3** 知的職業である *profession* に対して、体を使って作業するような仕事や技術職は *occupation* と呼ばれる。聖職者や学者とあるが、古くからあるイギリスの大学は（アメリカの場合もそうだが）聖職者を養成する場所として作られたという事情があるので、両者はもともと同じだったとも言える。文学などの現在大学で教えられる科目は、もともと神学を学ぶ場であった大学のカリキュラムに後になって加えられたものであり、それらの科目を総称する *liberal arts* ということばは、その名残である。イギリスには、*professional* ではなく *amateur* であることを良しとする *amateurism* があるが、これも元々は仕事をして収入を得る必要のない上流階級から生まれたものである。

**註 4** 「容認発音」(Received Pronunciation) の頭文字をとったもの。イギリス英語の「標準語」にあたる。ただし説明にもあるように、RP にもいくつかの種類があり、さらに多くの人々にとっては自然に身につく発音ではなく、意識して訓練してはじめて話せるようになるものである。

**註 5** 後ほど別の資料でも確認するが、かなり上流の階級の人々は階級社会において特に努力して自分を良く見せようとする必要がないので、態度も話し方もリラックスしている。階級が高いほど難しい言葉を話しているものと考えがちだが、事実は全く逆である。また特定の社会階層にいる人々を除いて、一般にイギリス人は自分を積極的に前面に出して自慢したり競争したりすることは良くないと考える傾向にある。“Me First” の考え方が強いアメリカ人と比較すると、イギリス人は極めて控えめな感じがするだろう。

### C. ミドル・クラスと上昇志向

(・・・) 必死で知識と教養を得ようという人々は、上昇志向のあるミドル・クラスとして、嘲笑の対象になる傾向にあった。美術館や博物館めぐり、有名な作家の生誕地や、名高い建築家が建てた教会や邸宅の観光、「教養」のために音楽会や芝居に行くことは、「ミドル・クラスの教養主義」とみなされた。

この風潮の中、本来の趣味と、「なりあがりの趣味」の違いが歴然と表れると思われたのは、住宅に関する趣味である。新興ミドル・クラスがいくら背伸びしても得られないのは、「先祖代々の家屋敷」だった。どんなに古めかしい様式をもって家を造っても、しょせん、本物の 17 世紀建築様式とそれを模した様式では、違いは明らかである。たとえ産業などで富を築き、相続税を払えないで困っているアップパー・

クラスの地主の家屋敷を買うことができたミドル・クラスの富豪がいても、その人物は、あとあとまでも「成り上がり地主」とその土地の人々から見なされることになる。

(・・・)

ここまでアッパー・クラスを志向しなくても、十分に上昇志向だとしてみなされるのが、ミドル・クラスの住宅地、郊外(サバービア)である。18世紀なかばあたりから、富を築いた商人たちが、わが家と商売の場所を別々にするようになった。彼らはミドル・クラスの新参者たちで、アッパー・クラスの人々のように、田舎で家屋敷をもつということはできなかったとしても、それを模倣することはできた。都市の郊外に模擬カントリー・ハウス<sup>6)</sup>を建て、そこに女房と子どもたちを住ませたのである。

さらに19世紀なかばから、いわゆる宅地開発が盛んになっていった。カントリー・ハウスを手に入れることができない裕福なミドル・クラスへの新参者たちが、ロンドン、マンチェスターなどの工業都市のまわりの郊外に、*rus in urbe*<sup>7)</sup>、つまり「都市における田舎」という空間を築き上げ、カントリーサイドのアッパー・クラスの生活を模倣する。

こういった郊外の住宅地は、最初は裕福なミドル・クラスのものであったが、19世紀後半には宅地開発が盛んになり、ミドル・クラスの新参者、つまりロウワー・ミドル・クラスをターゲットとした住宅が次々と造られるようになった。これらの家は、一つの建物に二つの世帯が入る、セミ・ディタッチドと呼ばれる様式の家で、今でもロンドンをはじめとする大きな都市の郊外に必ず見られるタイプの住宅である。一見すると普通の一戸建てなのだが、じつは二つに分かれているということ隠すために、最初はドアの色、窓枠の色、壁の色などが申し合わせで統一されていた。現在は逆にあえて、窓の形なども隣と違うものにするなどして、それぞれの個性を強調している場合が多いようだ。

これらの家には、必ず、小さくても家の前と後ろに庭<sup>8)</sup>がついている。これらの庭をどう管理するかも、それぞれの家の個性が表れるところである。庭がどんなに小さくても、花壇を作ったり、置物を置いたりする家もある。実際、イギリスでは小人やリスなどの動物の置物を庭に置くことは、「郊外的(サバーバン)」として揶揄の対象となっているほどである。

こういった小奇麗な住宅に「ミドル・クラス的」、あるいはさらに焦点を定めて「ロウワー・ミドル・クラス的」というレッテルを貼るのも、いかにもイギリスの階級意識がなせるわざだろう。たとえばレースのカーテン<sup>9)</sup>なども、外から簡単に見られる住宅だからこそ必要だという意味で、「ロウワー・ミドル・クラス的」とみられる。ソファと椅子を組み合わせた三点セット(英語では *three-piece suite* と呼ばれる)、椅子やピアノのカバー、テーブル・センターなどもすべて、「ロウワー・ミドル・クラス的」あるいは「郊外的(サバーバン)」として片付けられるのである。応接間に置かれたアップライト・ピアノ<sup>10)</sup>なども、その意味では致命的だ。(黒岩、岩田編 43-45)

**註6** 「カントリー・ハウス」と聞くとゴルフ場にある建物を想像してしまいそうだが、イギリスのカントリー・ハウスとは、狩猟のための場所なども含めた田舎の広大な土地に建つ壮麗な屋敷(*manor* あるいは *mansion* とも言う)のことで、富と権力の象徴であり、家柄を示すステータス・シンボルである。新興中流階級がそうした屋敷を模して家を建てるのは、日本で成金の成功者が天守閣つきのお城を建てて住むようなものである。とはいえ、イギリスでは自分の家は自分の城だという考え方が昔からあり、世帯主は一国一城の主なのである。DIY も盛んで、イギリス人の家は、他の点では控えめな彼らが自己主張をする数少ない機会を提供している。

註7 ラテン語の言い回しで、文字通り“country in the city”という意味。田舎と都市の対比もイギリス文化を理解するためには重要なテーマである。ガーデニングが盛んであることから分かるように、世界に先駆けて産業革命を起こし、急速な都市化と自然破壊を経験したイギリスでは、その反動からか、田舎の自然を懐かしみそれを大切にしようとする気持ちが強い。都市の中に人工的に田舎を再現しようとする *rus in urbe* にも、そうした気持ちが働いていると言える。しかし同時に、都市とは労働者の住む場所であり、上流階級の居場所は田舎であるというイメージも根強く、その点でも田舎は人々の憧れをかきたてるのである。

註8 アメリカでも自宅の庭はステータス・シンボルである（特に芝生）。しかしアメリカでは家の庭を *yard* と呼ぶのに対して、イギリスではそれを *garden* と呼ぶという違いもある。*yard* とはもともと「囲われた地面」ということで空間の広がりを示すことばである。*garden* はどうかというと、庭園や花園などという意味があるように、植物が欠かせない。用語の違いひとつとっても、両者のイメージする庭はかなり異なっていることが分かる。

註9 *lace-curtain* と形容詞として用いる場合は、「裕福な、家柄の良い」などの肯定的な意味を持つ。例えばアメリカの俗語で *a lace-curtain Irish* といえば、成功したアイルランド系移民の意味である（レースのカーテンがある家は上流であるということ）。しかしイギリスではこの形容詞が「中産階級的な、見栄っ張りな」という否定的なニュアンスを帯びる。つまり上流の側から見下したような感じなのである。

註10 これは少しわかりにくいかもしれない。まずグランド・ピアノではないところが中流家庭の事情を反映していると言える。しかしそれより問題なのはピアノを置く場所。来客に対して誇示するように応接間に置いてあるのが、いかにも見栄っ張りな印象を与えるのである。イギリスの広い邸宅には奥まった場所に *music room* と言う部屋があり、上流階級の場合はそこにピアノが置いてある。一方中流家庭の *music room* には、高価なステレオ機器が鎮座していると言われる。

※以下のポイントはしっかり押さえておきたい。

- ・イギリスにおける階級は、経済的なレベルや職種、教育程度（あるいは学歴）などで決まるものではない。
- ・階級の違いは話すことばの違いとして表れる。階級とはことばによる社会の階層化であると言いきる人もいるくらいである。
- ・中間の辺りでは階級間の移動が可能。真ん中よりやや下の人々は特に上昇志向が強く、逆に上流や労働者階級では所属する階級へのこだわりがほとんどない。
- ・ことばだけでなく、暮らしぶりといった目に見える部分からも、個々人の階級に対する意識が垣間見える。

## 補足資料

### ——ケーススタディーとプレゼンテーションの準備

<授業のポイント>

今回は、ここまでに配布した資料の内容に関わりのある映画作品をケーススタディーとして確認します。さらに個人プレゼンテーションのための準備として、いくつかの作業を行いますので、発表と資料作成の参考にしてください。

#### 1. プレゼンテーションの準備 (資料1)

- ・個人プレゼンテーションの準備として、アイデアをまとめて発表のトピックとテーマをまとめるところまでを、資料を参考にしながら進めていきます。

#### 2. ケーススタディー# 1 (資料2)

- ・イギリスにおける *cuteness* の例として挙がっていたヒュー・グラント主演の映画『フォー・ウェディング』(*Four Weddings and a Funeral*, Mike Newell 監督、1994年、イギリス映画)を観ます。いかにも *cute* な感じの主人公が、アメリカ人女性と恋に落ちるというロマンティック・ラブ・コメディですが、話されている英語のヴァリエーションや、冠婚葬祭の場面で示されるイギリス的な感覚などに注目してみましょう。

#### 3. ケーススタディー# 2 (資料2)

- ・英語の訛りと階級差をめぐる古典的作品である、『マイ・フェア・レディ』(*My Fair Lady*, George Cukor 監督、1964年、アメリカ映画)の中からいくつかの印象的なシーンを観ます。自分が作った彫刻に恋してしまうギリシャ神話のピュグマリオンをモチーフにした George Bernard Shaw の戯曲 *Pygmalion* を原作とするブロードウェイ・ミュージカルが映画化されたもの。英語の発音が単なる個人の特徴にはとどまらない意味を持つことが、この映画を観るとよく分かります。

#### 4. ケーススタディー# 3 (資料2)

- ・長崎出身でイギリスの小説家である Kazuo Ishiguro の傑作小説『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989) を原作とする、Anthony Hopkins 主演の同名映画 (James Ivory 監督、1993年、イギリス・アメリカ合作映画)を観ます。第二次世界大戦前後の時期のイギリスのカントリーハウスを舞台に、国際政治の力関係が描かれる一方で、主人公の執事が淡々と職務をこなす様子と、彼が元同僚に抱いた淡い恋心が、静かに語られます。カントリーハウスとはどのようなものかが良く分かり、またそれがアメリカ人の手に渡るという展開なども、イギリスの上流文化が経験した変化というものを如実に物語っています。

## 資料1

### プレゼンテーションとレポート作成のための準備

#### <トピックとテーマの決定>

プレゼンテーションを行い、それを基にレポートを作成するにあたって、

- ・何について論じるか —— トピック (topic)
- ・どのような切り口で論じるか —— テーマ (thesis)

の二つをまず決める必要がある。これには大きく分けて二つのアプローチが考えられる。

#### 1. 演繹的アプローチ (deduction)

これはあらかじめ中心となるテーマなどが決まっている場合。それに即して関連のあるデータなどを収集しまとめていく方法。

#### 2. 帰納的アプローチ (induction)

これはまず様々なデータを集めたうえで、それらを整理し互いに関連付けを行う方法。取捨選択して残ったものをテーマとして設定する。

これらはそれぞれ一長一短であって、状況に合わせて使い分けるようにしたい。また実際には、ふたつのアプローチを組み合わせて使うことも多い。今回は特に、帰納的アプローチを用いて、トピックとテーマを決定する作業を行うことにする。

#### <リスト作成とブレインストーミング>

1. 暫定トピックの設定 —— まず暫定的に「大きなトピック」(a general topic) を用意する。今回は授業のテーマに即して、「言語と文化」をトピックとして設定する。この段階で具体的にになりすぎないように注意。
2. リスト作成 —— 次に、「言語と文化」と聞いて思い浮かぶことを、出来るだけたくさんリストアップしていく。この際大切なことは、なるべく意識的な判断を加えずに、とにかく思いつくままに書きだしていくこと。

まずこの作業をしていきたい。リストの作り方は自由だが、大きなサイズのなにも書かれていない紙を用意するとよい。記入は英語でも日本語でも OK。

#### ●リストの例 A —— 箇条書き

#### 言語と文化

---

---



はなく自由に「連想する」ように頭を働かせるのがコツ。

3. リストをもとにブレインストーミング (brainstorming) を行う —— これは、雑多に散らばった情報を関連付けしたり、取捨選択したりしながら、そこに一定のパターンを見つけ出す作業。一人でやる場合と他の人と協力して話し合いながら進める場合とがあるが、基本のところは同じ。今回はクラスメートとペアまたはグループでブレインストーミングを行うことにする。
4. リストを見せ合って議論する (comparing notes) —— クラスメートとそれぞれが作成したリストを交換する。パートナーのリストに目を通し、個々の項目について質問し、関連のありそうな項目についてコメントを加える。また自分のリストについて相手に説明してあげる。ここでのポイントは、相手から出たコメントや質問、自分が相手に対して説明したことなどを忘れないようにメモしておくこと。
5. リストを見直しグループ分けする —— パートナーとの議論を踏まえてもう一度自分が作成したリストを見直す。その際に、互いに関連があると思われる項目をグループとしてまとめていく。「箇条書き」の場合は、項目の前に記号を付けたり色の違うペンで下線を引いたりする。また「ランダム・メモ」の場合は、項目同士を線でつないでいく。どのグループにも入らない物は今回不要な項目なので、取り消し線を引いて除外する。
6. サブトピックの選定 —— ここまでの作業で出来た項目のグループにそれぞれ分かりやすいタイトルをつける。これらは最終的に決める全体テーマについて、具体的に論じる際のトピックとなるので、多すぎず少なすぎず、だいたい3から5個のグループが残るようにしておきたい。ここで作ったサブトピックも、自分で参照しやすいようにまとめて書きだしておくといい。
7. テーマの決定 —— ここまでのプロセスで、「言語と文化」について自分はどのような関心を抱いているのかが、かなり明確になってきたはずである。いよいよ、作成した資料、特にサブトピックのリストを参考に、最終的なプレゼンテーション／レポートのテーマを決定する。実際に発表用資料やレポートを作る際のガイドラインとして生かせるように、全体の構成も考えて、見取り図を作っておくと便利。

#### ●プレゼンテーション／レポートの構成例

テーマ：内容をよく示すタイトル (例「〇〇からみる現代アメリカの食生活」)

イントロダクション：(トピックとテーマについての説明。thesis statement  
の提示)

トピック 1： \_\_\_\_\_  
(トピック 1 の結論と、次項へのトランジション)

トピック 2： \_\_\_\_\_  
(トピック 2 の結論と、次項へのトランジション)

トピック 3： \_\_\_\_\_  
(トピック 3 の結論)

結論：(イントロダクションで述べたことの再確認。今後の抱負など)

構成はレポート等を作成する際に変える可能性があるが、書き始める前の段階でしっかりと構成を考えておくと、実際の作業がかなり楽になる。確認しておきたいポイントは、「一つのテーマについてのみ議論できているか」と「議論の流れは分かりやすく説得力があるか」の二つ。途中で脱線して関係のない話が続くのは、学術的なレポートとしてはあまりほめられたことではない。

8. イントロダクションの作成 — 構成のしっかりしたレポートを作るために特に重要なのは、イントロダクションの書き方である。学術的エッセイの場合は、以下のような構成が一般的である。

**書き出し：**読み手の関心を引き付けるような話題を最初に出す。具体的な事例や、問いかけ、あるいは引用などを持ってくると効果的。

**トピックの提示：**エッセイの中で扱う話題について説明する。書籍の場合は作者、タイトル、さらに概略的な内容の説明などを、簡潔にまとめて紹介する。

**Thesis statement：**これはイントロダクションの中でも特に重要な部分。段落の最後に来ることが多い。

**Thesis statement**とは、エッセイ全体の要約であり、テーマは何か、それをどのように論じるのか、また議論を通して明らかにしたいことは何かを、1から3センテンス程度にまとめたもののこと。こ  
こだけ読んでもエッセイの内容が伝わるように書いておきたい。

※プレゼンテーションに先だって、以上の作業の成果を講師までメールで知らせてください。発表タイトルとイントロダクション（thesis statement）を英語でまとめたものを、次回の授業までにお送りください。

## アメリカのセルフ・イメージ

<授業のポイント>

今回はアメリカ人が集的に自分たちに対して抱くイメージについて考えます。配布資料はかなりの量になりますが、まずは概念的な部分をしっかり押さえておきましょう。次回は具体的に映画作品などを見ていながら、今回の授業で明らかになったポイントを確認したいと思います。

### 1. ポジティブ・シンキング (資料1)

- ・資料1の英文を読み、アメリカ人を形容する際にしばしば用いられる「ポジティブ」という言葉について考える。確かにアメリカ人は、前向きに物事を考えることを良しとし、自分たちはそのような人間であると見られたがっているようだ。では、アメリカがほとんど国を挙げてポジティブ・シンキングを奨励するのはなぜなのだろうか。

### 2. ハリウッド映画とアメリカン・コミック——「アレゴリー的読み」 (資料2)

- ・近年のハリウッド映画はいったい何を描いてきたのか。資料2の英文資料を読み、ハリウッドの大作映画の新しい観賞法について考える。
- ・続いて日本語の資料を読み、ハリウッド映画における「心理主義」とは何かを確認する。
- ・さらにアメコミのヒーローがいかにかアメリカのセルフ・イメージを体現しているのかについての資料を読み、上に挙げた「心理主義」との関係で近年顕著になってきた傾向について考える。

### 3. グループによるプレゼンテーション (資料3)

- ・アメリカにおけるトラウマ的経験と集的アイデンティティーの密接な関係についての、英文の資料を読む。
- ・グループごとにプレゼンテーションを行う。担当する英文箇所の内容を解説し、そこに書かれている以外の具体例なども盛り込みながら、重要なポイントについて説明する。

<参考文献>

Ehrenreich, Barbara. *Bright-Sided: How Positive Thinking is Undermining America*. New York: Picador, 2009.

Metz, Walter "Hollywood Cinema." Christopher Bigsby. Ed. *The Cambridge Companion to Modern American Culture*. Cambridge: Cambridge UP, 2006. 374-91.

Neil, Arthur G. *National Trauma and Collective Memory: Extraordinary Events in the American Experience*. Second Edition. Armonk, NY: M. E. Sharpe, 2005.

斎藤環『心理学化する社会——癒したいのは『トラウマ』か『脳』か』河出文庫、2009年  
内田樹『街場のアメリカ論』NTT出版、2005年

#### D. ハリウッド映画と「トラウマ」

心理学、とりわけトラウマをモチーフとした映画となると、これは枚挙にいとまがないほど存在する。(・・・)近年の、邦画洋画を問わないトラウマ・ストーリーのオンパレードを見ていると、この種の問題がなんのひねりもなく、非常に“ベタ”なかたちで取り扱われがちな傾向があるように思う。その傾向は、近年いよいよ拍車がかかり、もはやハリウッド映画はトラウマなしでは成立しないのではないかと思われるほどだ。(斎藤 38)

#### E. 映画『ランボー』の例

ベトナムでは英雄と呼ばれた男・ランボーは、友人を訪ねた帰りに立ち寄った村で、うさんくさいよそ者扱いを受け、無実の罪で虐待を受ける。なんとか脱出して逆襲に転じたランボーは、一〇〇〇人もの警官を向こうに回し、元グリーンベレーの技術を駆使して徹底抗戦する。どんな環境にも適応できる、ほとんど殺人機械のような化け物ぶりはきわめて痛快だった。このまま最後まで突っ走ってくれば、立派なB級作品(これはけっしておとしめる言葉ではない)として、長く記憶に残ったはずだ。

しかし、ラストシーンに至って、映画は突如としてシリアスな告発ものに転じてしまう。ランボーを説得に来た元上司のトラウトマン大佐に、彼は嗚咽とともに訴えるのだ。友人を爆死させたベトナムでの過酷な体験。夜ごとにみる拷問の夢。そして、国のために戦い、苦しんだ彼らに対して、アメリカは何もしてくれなかったこと。もちろん、このシーンゆえに、本作を評価している人がいることも知ってはいる。しかし僕は、このシーンをあきらかに蛇足と考える。スタローンが、しばしば冗談めかして揶揄されるほどには愚かなマッチョであるとは思えないし、少なくとも凡百の脚本家よりはすぐれたシナリオの書き手ではあると思う。しかしここだけは、「社会派」的表現への、彼自身の秘めたるコンプレックスが露呈してしまった感が強い。(斎藤 39-40)

#### F. 映画におけるトラウマ描写はどうあるべきか

まず、いかなる描写であれ、けっしてトラウマは観客に共有され得ないことを忘れるべきではない。それはあくまでも観客の享楽のために描かれるものであって、告発や風刺とトラウマは原則的に相性が悪い。また、虚構としてのトラウマを描くとき、精神医学的な正確さはむしろ物語を殺してしまう。それは必ず、教科書的な図式の退屈な反復に陥ってしまうだろう。トラウマがいかなる効果をもたらすか、ここにおいて作者の創造性が最大限に発揮されるべきなのであり、専門家による「荒唐無稽」といった悪口を恐れるべきではない。ただし例外的に、コメディ映画においては、図式的であるほうが有効たり得ることは、先ほども述べた。逆に復讐や悪事の動機としてトラウマを描くことは、映画を台無しにするための近道である。動機としてのトラウマは、最悪の図式のひとつであるからだ。むしろ人物のキャラクター設定や、サイドストーリー的な要素として取り込むほうが効果的である。つまるところ、トラウマを扱う際の最大の原則は、「トラウマそのものを直接に描いてはいけない」ということに尽きるだろう。なぜならトラウマが効果を発揮するのは、それが常に「覆われた状態」において、であるからだ。(斎藤 54)

## G. ハリウッドの「心理主義」へのアンチテーゼとしての『ダークナイト』

二〇〇八年八月、私はシネコンの暗闇で、ひとつの「終わり」を目撃していた。

上映されていた映画は『ダークナイト』。アメリカン・コミックのヒーロー、バットマンを主人公として制作された実写映画シリーズの第六作目である。

そして『ダークナイト』こそは、ハリウッドにおける「心理主義」に、決定的な死亡宣告を告げる映画にほかならなかった。

(・・・)

すでに多くの指摘があるように、本作の最大の功績は、バットマンの敵役である悪の化身ジョーカーを完璧に造形してみせた点にある。初期シリーズのジョーカーはジャック・ニコルソンの当たり役として有名だったが、本作が実質的な遺作となった若手俳優ヒース・レジャーの演技は、それを完全に過去のものにした。

象徴的な場面がある。

物語の中盤、ジョーカーは犠牲者に向けて、自らの口から頬まで裂けた傷跡の由来を語り始める。瞬間、私は久々にいやな予感を覚えた。ああ、これほどの傑作すらも、ハリウッド流心理主義の図式を反復してしまうのか。

しかし、その予感は、小気味よく裏切られることになる。

ジョーカーは傷の由来を繰り返し語る。しかしそのつど、彼の語る「由来」は異なっているのだ。

最初の場面、ジョーカーは、子供の頃の凄惨な思い出を語ってみせる。酒乱の父親が母を刃物で刺し殺し、同じ刃物で自分の口も切り裂いたのだ、と。しかし次の告白では、ぜんぜん話が違う。借金がかさんで身も心も傷ついた妻を笑わせるために、自分で口を切り裂いてみせたのだ、というのだ。

一体、どちらが真実なのか。

もちろん、どちらもデタラメだ。本作でジョーカーは、自らの悪意がちゃちなトラウマなどに根拠づけられるものではないことを、高らかに宣言してみせたのである。

ジョーカーが体現するのは徹底して「根拠なき悪」だ。彼には指紋やDNAのレベルに至るまで、あらゆる過去の痕跡が欠けている。そこには「欲望」という根拠すらない。彼は金にも権力にも興味がないとうそぶきつつ、札束を積み上げて火を放つのだ。彼が望むのは、人々が——とりわけバットマンが——その良心ゆえに葛藤し、苦悶する姿を眺めることのみ。それは言葉の本質的な意味において、「根拠」でも「欲望」でもない。

これほど純粋に無根拠な悪が描かれたことは、おそらくハリウッドのメジャー大作では前例がないのではないか。

(・・・)

繰り返そう。『ダークナイト』でジョーカーが殺したのは、「心理学化したハリウッド」にほかならない。「殺した」というのは、けっして大げさな言い回しではない。この映画以降、どれほど「臨床的に正しいトラウマ」にもとづいた怪物を描いたところで、それがことごとく陳腐なものにしか見えないであろうことは、もはや確定済みと言ってよい。

映画が「悪」に根拠を求めず、言い換えれば悪を自由に根拠づけられるようにしたという意味で、ジョーカーはハリウッドを心理主義から解放したのである。(斎藤 233-36)

## H. アメコミのヒーローに、アメリカのセルフ・イメージが透けて見える

アメコミに批評性がないというのは、いいことでもあるんです。

というのは、そのせいで、アメコミにはアメリカの欲望が無反省的に露出してしまふからです。アメコミこそは、「アメリカの無意識」を知るうえでは格好の材料だとも言えるわけです。

以下は私の暴走的思弁ですが、私の見るところ、アメコミのスーパーヒーロー物語は、ある設定を共有しています。それは「理解されない」ということです。

主人公は例外なく特殊な能力を持つ白人男性です。ところが、クラーク・ケント（スーパーマン）もブルース・ウェイン（バットマン）もピーター・パーカー（スパイダーマン）も、そのスーパーな本性を見せることを禁じられ、市民的な偽装生活を送ることを余儀なくされています。彼らはこの二面性の乖離に苦しんでいる。これが第一の条件。

スーパーヒーローとして活躍するのだけれど、どういうわけか必ず誤解されて、メディアからバッシングを受ける。これが第二の条件。

必ずそうなんです。ヒーローは必死に頑張っているのだけれど、ちょっと手加減を誤ると、人々から「なんて乱暴な人なの」と罵られる。それどころか、うっかりすると「社会秩序を乱しているのは、おまえが退治している悪者たちではなくて、むしろお前の方だ」といういわれなき非難さえ受けるようになる。そう言われてヒーローががっかりするという場面が必ずあります。必ず、ある。

(・・・)

同じ話をよくもこれだけ飽きずにやるよな、とあきれられるほど、このワンパターンが繰り返されます。これは国際社会の中でのアメリカ人のセルフ・イメージなんじゃないかと私は思っています。

「ならずもの」がいます。「市民」たちは合法的に、陳情したり説得を試みたりして、なんとか平和的に「ならずもの」をおとなしくさせようとしますが、もちろん「ならずもの」は全然歯牙にもかけません。「ならずもの」の暴虐が忍耐の限界を超えたところで、やむなく「ヒーロー」が実力行使に出ます。でも、命がけの闘争で「ならずもの」を倒しても、「市民」たちは通りいっぺんの感謝のことばを口にすならまだしも、しばしば「よけいなことをして」と言わんばかりに「ヒーロー」を冷たく追い払います。悪と戦って、傷つきながら勝利を得るのだけれど、彼がそのために命をかけて戦った肝心の「市民」たちは彼に少しも感謝しようとしません。まるで平和を自分で手に入れたように自慢顔をしている。おい、ふざけるなよ。それはオレが血を流して、おまえたちに「与えた」平和じゃないか.....。

というのがアメリカが国際社会に対して抱いている、本音の不満だと思います。自分たちはこうやって悪を倒して、世界に平和をもたらしたのに誰も感謝してくれない、というのがアメリカのサイレント・マジョリティの切なる声だろうと思います。その満たされない不満がアメリカのアメコミ映画に恥ずかしくらいあらわに噴出している。

要するに「ヒーローに少しは感謝したらどうかね、キミたち」というのがアメリカの言いたいことなんです。でも、そんなことは外交の場では言えない。本音ではあるけど、あまりに幼児的な欲求であることがアメリカ人自身にもわかっているからさすがに恥ずかしくて口には出せない。たしかにアメリカが口に出して「感謝しろよ」と言えば、どんな国もすぐに「はいはい、どうもいつもありがとうございます」とぺこりと頭を下げるに決まっています。でも、それじゃまるで子供扱いされていることですね。だから、内心では「もっと感謝しろ」とは思っているけど、口に出しては言えない。その抑圧された欲望が物語を迂回して、スーパーヒーローのこうむる無理解と受難という説話原型に繰り返し回帰して

くる。

たぶんそうじゃないかと思えます。

このストーリー・パターンにアメリカの人たちは『スーパーマン』が登場した一九三八年から七十年間固着してきたわけです。とりわけ、マーベラス・コミックスのヒーローたちが銀幕に簇生（そうせい）してきたのは九〇年代以降です。それは「世界の警察」アメリカが、世界に平和をもたらすよりはむしろ不和と戦争をもたらしているのではないか、というアメリカへの冷たい視線が国際社会で支配的になってきた時期と重なります。（内田 83-86）

## I. 『ダークナイト』におけるアレゴリー

「ジョーカー」の出現は、なかば以上に必然的なものだった。

なぜなら本作もまた、「9・11」以降のリアルにもとづいているからだ。

（・・・）バットマンとジョーカーの鏡像関係はあきらかだ。二人とも社会から見ればひとしく「化け物」にすぎず、バットマンが存在しなければ、ジョーカーもまた存在しない。実際、ジョーカーは「お前がいなけりゃ、俺はただのチンピラだ」と自覚している。

彼らの関係から誰もが容易に連想するのは、頼まれもしないのに世界の自警団を買って出る「善」の大国アメリカと、「悪」のテロリスト・ネットワーク、アルカイダの関係だろう。そもそもアルカイダの発端は、ソ連のアフガニスタン侵攻に際してCIAが組織したとも言われている。

このときアメリカとアルカイダは、バットマンとジョーカーのごとく、相互に根拠づけ合うという意味で、合わせ鏡のような関係におかれている。それゆえ「9・11」の遠因は、アメリカの正義そのものだった、という見方もあながち不当なものとはばかりも言えない。（斎藤 236-37）

**解説：**日本語の資料からの引用では、アメリカのコミックと映画をアレゴリーとして見た場合に浮かび上がる、「アメリカの無意識」が俎上にのせられる。これらはいずれもひとつの解釈なので、必ずしもこれが正解であるというわけではない。しかし、想像力を働かせて観賞すると、今まで分からなかったことが見えてくるという面白さは伝わったことと思う。

斎藤氏の指摘する「心理主義」とは、人間の生活や社会に起る理解不可能なものを、全て心理学的な説明に還元して、それで「分かったような気になる」ことである。幼少の頃に虐待を受けていた。ならば成長して猟奇殺人を犯したとしても、情状酌量の余地がある。裁判員制度が導入された日本では、この種の心理学的判断の是非が、今後ますます問われていくことになると思われる。文学や哲学が流行らなくなった昨今、文系科目としては心理学が人気を博しているという。トラウマというものさえ出しておけば説明としてはOKという風潮がますます強まる傾向にあるとすれば、それを批判的に検証する態度も必要になるだろう。とはいえ、斎藤氏にしても内田氏にしても、その解釈はかなり「心理学的」であるような気がする。アレゴリーと心理学、あるいは精神分析は相性がよいので、仕方がないのかもしれないが。

いずれにしても、現代アメリカからやって来るヒーローたちは、それぞれにトラウマを抱えている。それをどう読み解くかは人それぞれだが、深読みしていくと、国際関係の中でアメリカ人がそうありたいと願うセルフ・イメージが浮かび上がってくる。隠されたものを明るみに出すには、こうしたアレゴリー的読みが有効なのである。

## アメリカのセルフ・イメージ（2）

### ——ケース・スタディー編

<授業のポイント>

前回配布資料のポイントを、演劇と映画の具体的な作品を通して確認します。リサーチの際には、自分に馴染みのある様々な作品や文化事象を例として挙げながら議論していくと、より説得力が増すでしょう。今回の資料からも、そうしたアプローチについて学んでいただければ幸いです。

#### 1. 初期アメリカ演劇に見る「アメリカ神話の原型」（資料1）

- ・18世紀終わりから19世紀初めに発表されたアメリカ演劇作品の戯曲を読む。作品についての解説とあらすじに続いて、実際のテキストからの引用を掲載してある。
- ・これらの作品は、アメリカという国が作られ、そこに独自の文化が発展していく様子を物語として提示している。歴史を物語として描き出すときの「見せ方」の方に注目して、アメリカらしさについての「神話」が、文化的作品を通してどのように作り出されるのかを考えてみたい。

#### 2. 補足資料——second creation としてのアメリカの始まり（資料2）

- ・テクノロジーという観点からアメリカの歴史と文化を研究している David E. Nye の著作からの引用を読み、アメリカが Nye が言うところの “second creation” として出発したことを確認する。
- ・ここまでの講義内容と、この後のケース・スタディーをつなぐための理論的バックグラウンドを提供するものなので、しっかりと読んで内容を押さえておきたい。

#### 3. 映画が描くアメリカのセルフ・イメージ——近年の傾向について

- ・『アイアンマン』（*Iron Man*、John Favreau 監督、2008年、アメリカ映画）——マーヴェル・コミックスの漫画を実写映画化したもの。アメコミのヒーローが陥りがちなパターンを避けて、極めてオープンなヒーロー像を提示した画期的作品。世界の警察としてのアメリカの矛盾やテクノロジーによる問題解決など、授業内容と関連する見どころが多い。
- ・『チーム★アメリカ/ワールド・ポリス』（*Team America: World Police*、Trey Parker 監督、2004年、アメリカ映画）——『サウス・パーク』などのどす黒い風刺のきいたアニメを発表し続けるクリエイター・チームによる、『サンダーバード』風の人形劇映画。タイトル通り世界の警察アメリカの「活躍」を風刺をこめて描き、それを徹底的に笑いのめす娯楽映画。
- ・『イエスマン——“Yes” は人生のパスワード』（*Yes Man*、Peyton Reed 監督、2008年、アメリカ映画）——イギリスのユーモア作家の同名のノンフィクションを元にした、ジム・キャリー主演のコメディ映画。アメリカの一大産業となった「ポジティブ・シンキング」に振り回される主人公の姿が、笑いと涙を誘う。ジム・キャリーの怪演がいい味出しています。

※今回参考にした文献の情報は、各資料の中に示してあります。